



前期ウィトゲンシュタインにおける「世界の非存在」：ヴァン・インワーゲンの偽装的な無との対比から

丸山, 栄治

(Citation)

愛知 : $\phi \iota \lambda \omicron \sigma \omicron \phi \iota \alpha$, 29:43-57

(Issue Date)

2017-12-15

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81010343>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81010343>



前期ウィトゲンシュタインにおける「世界の非存在」 ーヴァン・インワーゲンの偽装的な無との対比からー

丸山 栄治

1. はじめに

なぜあるものがあって何もないのではないのか (Why is there something rather than nothing?) という問いに対する解答可能性や有意味性の問題は、現代形而上学において継続して議論されている問題のひとつである⁽¹⁾。この問いについて議論される際、この「なぜあるものがあって何もないのではないのか」という文は常に同じ仕方で解釈されるわけではなく、この問いがいかなる存在についての問いであるか、何がその解答となりうるか、見解は一致していない⁽²⁾。そのため、この問いについて議論する際には、この問いをどのように解釈しているのかを明示する必要がある。

こうした多義性は、何かがある、世界が存在するということが驚きや神秘とともに語られる場合にも起こりうる。ウィトゲンシュタインは、『論理哲学論考』(以下『論考』と略す)や「倫理学講話」で「神秘的なのは世界がいかにあるかではなく、世界があるということである。(6.44)」
「私は世界の存在に驚く」⁽³⁾と述べている。彼はこれらの文をナンセンスであるとしながらも、人がこれらの文で何かを表現しようとする傾向をもつことを否定しなかった。本稿では、前期ウィトゲンシュタインにおいて、これらの文に与えたいく内容が何であったのか、何に対する驚きについて語ることができないと述べていたのかを、関連する他の事柄に対する驚きと区別できるような形で明らかにしたい。

そこで、本稿では「世界が存在しない」という文でウィトゲンシュタインが何を想定していたのかに注目する。現代形而上学では、「なぜあるものがあって何もないのではないのか」という文における「何もない」

の解釈に注目し、それが本当に全く何もないということなのか、また、「何もない」の解釈の違いがどのように文全体の解釈に影響するのかといった問題に関する議論がある⁽⁴⁾。ウィトゲンシュタインの「世界の非存在」の場合はどうだろうか。ウィトゲンシュタインは「倫理学講話」において、「私は世界の存在に驚く」がナンセンスである理由を、「世界が存在しないことが私には想像できないからだ」と述べている⁽⁵⁾。ここでウィトゲンシュタインが従来は想像可能であるかのように考えられる事柄として何を想定していたのか、他の無に関する理解と比較し明らかにしたい。

まず、ピーター・ヴァン・インワーゲンの偽装的な無（counterfeit nothing）という考えを手がかりとする。偽装的な無は、彼の1996年の論文「そもそもなぜ何かがあるのか（Why is There Anything at All?）」の最後で、このタイトルの問いへの自分自身の解答に対する疑念を表した言葉である。この偽装的な無という疑念は、『論考』のようにすべての可能世界に同じ基礎の対象が存在するとした場合に生じるものであり、本稿ではこの疑念から『論考』において問題となりうる無について考えてみたい。そして、ウィトゲンシュタインが問題にした世界の非存在が、この偽装的な無とも全く何もないということとも異なる事柄であることを示す。

本稿は以下の手順で考察を進める。まず、ヴァン・インワーゲン（1996）における偽装的な無という考えを述べ直す。そして、これと対比させる形で、『論考』において考えられうる二つの無、すなわち、論理空間においていかなる事態も成立していない場合（3節）と世界の非存在について確認する。後者の世界の非存在については、それが対象の非存在と不可分であること（4節）、そして、「いかなる対象も存在しない」ということを語ることはできないこと（5節）を確認した上で、世界の非存在が全く何もないということとどう異なるのか検討する（6節）。

2. 偽装的な無

ヴァン・インワーゲンは、「なぜ何かがあるのか」という問いに対して、

具体的対象が一切存在しないケースが現実となる確率はほぼゼロに近いことを示すことで答えようとする。しかし、彼はこの論文の最後で、何もない可能世界、具体的対象が存在しない可能世界が、一種の無の模造品、偽装的な無ではないかという疑念を提示している。ヴァン・インワーゲンによれば、こうした疑念は、彼が一連の検討において『論考』のようにどの可能世界にも同じ基礎的諸対象が登場することを暗に認めているような場合に生じる⁽⁶⁾。彼自身が最終的にこれを認めているかどうかは定かではないが、仮にそれを認めていた場合、具体的対象が一切存在しない世界について、彼は次のように述べている。

かりにそうした場合、各世界に登場する基礎的対象は、空間における点のようなものとなり、そのそれぞれが「オン」／「オフ」あるいは「満」／「空」といった二つの可能的状態をもっていることになるだろう。そうすると私は、空っぽな世界を、基礎的対象のすべてが「オフ」または「空」の状態にあるような世界として捉えているということだろうか。⁽⁷⁾

基礎的対象がどの可能世界にも登場するならば、何もない可能世界にもそれらは登場する。そのため、この世界では、基礎的対象はいずれも「オフ」となっているものの、基礎的対象が何らかの仕方では存在していることに変わりはない。ヴァン・インワーゲンが「偽装的」と呼ぶのは、このような可能世界には、基礎的対象が存在しかつ存在しないというような矛盾が生じているように思われるからであろう。このような指摘はウィトゲンシュタインの『論考』の枠組みにおいて問題となる無にもあてはまるのだろうか。

3. どの事態も成立していない場合

ヴァン・インワーゲンが偽装的な無と呼んだものは『論考』の枠組みのどこにあてはまるのだろうか。この点について、本節以降ではヴァン・

インワーゲンの用語から離れ、主に『論考』における用語とともに検討したい⁽⁸⁾。

ヴァン・インワーゲンによる偽装的な無という疑念が『論考』において直接あてはまるのは、論理空間において要素命題が表現する事態のいずれもが成立していない場合である。ウィトゲンシュタインによれば、事態は諸対象の配列からなり、成立か不成立かの2通りの可能性がある。例えば、世界に成立しうる事態が2つしかない場合を考えよう。この場合、事態の成立・不成立の組み合わせは4通りある。すなわち、(事態 a、事態 b のみが成立しうるとすれば、) 事態 a も事態 b も成立していない場合、事態 a のみが成立している場合、事態 b のみが成立している場合、そして、事態 a と事態 b の両方が成立している場合の4通りである(4.27)。さて、ある事態を表現している要素命題は対象を表現する名の配列からなる。要素命題は、それが表す事態が成立している場合に真、不成立の場合に偽となる。そのため、要素命題の真偽の組み合わせは、事態の成立・不成立の組み合わせと同じ数だけある(4.28)。そして、すべての要素命題の真偽を確認すれば、世界を完全に記述することができる(4.26)。ここで明らかにウィトゲンシュタインは、どの事態も成立していない場合、すなわち、どの要素命題も偽となるような場合を排除していない。成立しうる事態がどれだけ多くても、つまり、論理空間がどれだけ大きくても、諸事態の成立・不成立の 2^n 個の組み合わせの中に、どの事態も不成立である場合が含まれるのである。

この、どの事態も成立していない場合を無とみなせば、ヴァン・インワーゲンの偽装的な無と同様の次のような疑念が生じうる。要素命題がすべて偽であるとするためには、予めすべての要素命題の意義が確定していなければならない(4.064)。そして、次節で確認するように、要素命題の意義が確定しているためには世界の実体としての対象が存在しなければならず、そして、この実体は事態の成立・不成立とは独立に存在する(2.0231)。したがって、事態の不成立が対象の非存在を含意するとすれば、対象が非存在であるにもかかわらず、対象が存在するというヴァン・インワーゲンの場合と同様の矛盾が生じるのである。ヴァン・

インワーゲンとウィトゲンシュタインで異なるのは、ヴァン・インワーゲンが各々の基礎的諸対象に対して、「オン」と「オフ」という2つの可能的状態を考えていたのに対し、ウィトゲンシュタインは事態に対して、成立か不成立かを考えている点にある。

では、ウィトゲンシュタインは「世界の非存在」として、こうしたどの事態も不成立であるような場合を考えていたのだろうか。仮にそうであれば、世界が存在しないということを、要素命題のすべてを否定した命題によって表現することができるだろう。しかし、実際には、「世界が存在しない」はナンセンスであるとされている。そのため、世界の非存在は、どの事態も不成立である場合ではなく、そもそもいかなる対象も存在しないような場合であると考えられる⁽⁹⁾。すなわち、それは命題の意義（命題が記述する状況、事態）の確定に必要な対象がそもそも存在しない場合である。

4. 対象の存在と世界の存在

『論考』において世界の存在が対象の存在と不可分であることは、世界が事実の総体であり、事実が世界の実体である対象の配列からなるとされていることから明らかである。では、なぜ世界は単純な構成要素からなるのか。ウィトゲンシュタインは次のように述べている。

2.0211 世界にいかなる実体も存在しないとしたら、命題が意義をもつか否かは、他の命題の真偽に依存してしまうことになる。

2.0212 そのとき、世界の像を（真であれ偽であれ）描くことは不可能である。

すなわち、世界の像を描くことが可能であるならば、世界には少なくともひとつの対象が存在しなければならない。さらに、ウィトゲンシュタインは対象を表す名について、「単純記号へと分析可能である」という要請は、すなわち、命題の意義が確定していることの要請にほかならない。

(3.23)」と述べている。こうした所見から、ウィトゲンシュタインが、世界が最も単純な構成要素からなっているのは、世界の事実を描写する命題の意義が確定しているからであると考えていたことがわかる。

では、命題の意義が定まっているために、なぜ世界が単純な構成要素からなるのでなければならないのか。まずここで名や対象について問題となる「単純さ」について確認する必要がある。鬼界(2003)によれば、ウィトゲンシュタインは『論考』の執筆過程において二種類の単純さの概念を検討している⁽¹⁰⁾。ひとつは、物体のような複合物がどこまで分割、分解できるかが問題となるような単純さであり、何が単純であるかは将来の経験科学によって定まる。もうひとつは、言語の話し手である私が「もの」として対象化し、それに名を与える作用に着目した場合の単純さである。例えば、眼前のこの時計は、歯車などの部品へと分解することは可能だが、「この時計」という語で何かを名指す際、それを分解する必要はない。すなわち、私がこの時計の中に歯車があるかどうかを知らない場合でも「この時計は引き出しの中にない」と語ることができるからである⁽¹¹⁾。この単純さの概念のもとで、命題の意義の確定に関わる命題の構成要素としての名は、物体だけでなく、関係、性質といったものも指すとウィトゲンシュタインは考えており、『論考』で採用されているのはこの後者の単純さの概念である。この点を踏まえると、次のようになるだろう。命題の意義が定まっているためには、命題の構成要素である名の意味が確定している必要がある。そして、そのためには、名の意味である対象を私が世界の構成要素として把握していなければならない。したがって、私が把握する世界の単純な要素である対象の存在が命題の意義の確定の根拠となっているのである。

では、ある人がすでに使用している名の意味を我々はどうのように知ることができるのか。ウィトゲンシュタインによれば、名を定義することはできず、対象が何であることを語ることはできない(3.26, 3.221)。名が意味する対象の把握は、その対象の論理形式、その対象がどのような事態のもとに現れうるかを把握することによってはじめて可能となる。そのため、対象を表す名がその対象の論理形式に従ってある命題の中で

使用されることによって、それが何の名であるかを把握することができる (3.327)。

このように、命題の意義の確定の根拠として対象は存在するが、それが何であるかを語ることはできない。ウィトゲンシュタインはこれと同様の考えを、要素命題の相互独立性の主張を放棄した後、「倫理学講話」と近い時期にももっていた。1930 年 1 月のヴァイスマンのノートによれば、ウィトゲンシュタインは、「ある同じ場所が赤くかつ青いということとはありえない」という構文法の規則の妥当性の根拠をシュリックに問われ、次のように答えている。

〔構文法の規則の妥当性の根拠となるような経験的認識は〕存在する、そして存在しない。それは全く、人が経験的という事で何を理解するかに依存する。もし人が経験的認識という事で、或る命題で表現され得る認識を理解するとすれば、それは経験的認識ではない。もし人が経験的認識という事で或るもっと別のものを理解するとすれば、構文法もまた経験的である。私はかつての論文において、論理は「いかに」のまえにあるが、「何が」のまえにはないと言った。論理は、(何かが現に存在するという意味で) 何かが存在するという事に、即ち、事実が存在するという事に、依存している。しかし、それは事実がいかなる状態であるかということには、即ち事実がそのようにあるという事には、依存しない。⁽¹²⁾

ここでもウィトゲンシュタインは「かつての論文」である『論考』の所見を挙げながら、構文法の根拠となる事実は存在するが、それは命題によって表現できる事実ではないとしている。

以上から、「世界が存在しない」で想定されている事柄とは、単に、世界の構成要素が存在しないということだけでなく、私が有意味な仕方世界について語ることの根拠が存在しないということがわかる。

5. 「いかなる対象も存在しない」は語ることができない

では、対象が一切存在しないと語ることがなぜできないのか。『論考』

において、ラッセルの確定記述句と同様、複合的なものについての命題は、その複合的なものが存在しない場合、ナンセンスであるのではなく偽である (3.24)。しかし、「いかなる対象も存在しない」といった命題はナンセンスとされている。

いかなるものも存在しないということを表現しようとする際、しばしば同一性を用いて「 $\sim \exists x(x=x)$ 」と表す。この場合、「自分自身と同一である」は、すべてのものがもっている一種の性質とみなされている。しかし、ウィトゲンシュタインは同一性を対象の性質とは捉えない。ウィトゲンシュタインによれば、記号「 $a=b$ 」という形式の表現は、記号「 a 」と「 b 」が置換可能であることを表現しているのであって、「 a 」の意味と「 b 」の意味の関係を表現しているのではない (4.241)。

ウィトゲンシュタインが「 $=$ 」を対象の性質や関係と捉えないのは、前節で述べた命題の意義の確定ということに関わっている。「 $a=b$ 」の「 a 」と「 b 」がいずれも対象を表す名である場合、話し手である本人にとっては「 a 」や「 b 」の意味は予め確定しているのでなければならない。そのため、「 $a=b$ 」が真であるかどうかは、世界の事実を確認する前に確定している。さらに、「 a 」や「 b 」の意味が不明である場合には、当人がこれらの記号をいくつかの命題の中でどのように使用しているかをみななければならない。この場合も、確認する必要があるのはそれらの記号が現れる命題の使用であって、世界の事実ではない。そして、もし「 a 」や「 b 」の意味が確定しないような場合には、これらの記号を含む「 $a=b$ 」が何と何について同一性を主張しているのか理解できない (4.233)。したがって、いずれの場合も対象同士の同一性を表すようにみえる命題は、世界の事実と比較することができず、疑似命題とされているのである⁽¹³⁾。

事実を参照しなければ真偽が決定しないよう命題の中には、一見すると何らかの同一性を表現しているようにみえるものがある。例えば、「(ある事故の) ただ 1 人の生存者は人物 c と同一人物である」というような命題の場合である。「 $\sim$ は (ある事故の) 生存者である」を S とすると、「 $\forall x (Sx \rightarrow x=c)$ 」と表せるかもしれない。しかし、ウィトゲンシュタ

インの記法によれば、これは同一性を用いない仕方で表さなければならない。すなわち、「 $\exists x (Sx \rightarrow Sc) \wedge \sim \exists x, y (Sx \wedge Sy)$ 」、つまり、「 S であるものが存在するならば Sc であり、かつ、 S である2つの異なるものは存在しない」と表せる (5.5321) ⁽¹⁴⁾。そして、この同一性を含まない命題は、確かに事実を参照することによって真偽が決定するのである。

したがって、記号同士の同一性ではなく対象の同一性を想定して表現される「 $\sim \exists x (x=x)$ 」も擬似命題となる。ウィトゲンシュタインは、次のような仕方で、この命題が、いかなる対象も存在しないことを表現するものではないと説明する。

5.5352 同様に「ものは存在しない」を「 $\sim (\exists x).x=x$ 」によって表現したくなりましょう。しかし仮にこれが命題であるとすれば、この命題は「ものが存在」するものの、これらのものが自分自身と同一でない場合にも、真となってしまうのではないだろうか。

「 $\sim (\exists x).x=x$ 」、すなわち、「 $\sim \exists x (x=x)$ 」、「自分自身と同一であるものは存在しない」が命題であるとしよう。そして、ここでは「 $\sim$ は自分自身と同一である」は「 $\sim$ は赤い」と同様にものの性質を表現しているとしよう。この場合、「自分自身と同一でないものが存在する」についても、(それが偽であったとしても) 有意味に表現することはできるだろう。その場合、「自分自身と同一であるものは存在しない」が真であるとしても、「自分自身と同一でないものが存在する」が真であることは排除できない。それは、「赤いものは存在しない」と「赤くないものが存在する」が同時に真となりうるのと同様である。そして、これでは「いかなる対象(もの)も存在しない」という最初に表現しようとした内容を表しているとはいえなくなってしまう。したがって、いかなる対象も存在しない場合、すなわち、世界の非存在を表現することはできないのである ⁽¹⁵⁾。

6. 世界が存在しないならば全く何もないのか

以上を踏まえて、前期ウィトゲンシュタインにおける世界の非存在が全く何もないということかを検討したい。まず、世界の非存在には、ヴァン・インワーゲンが提示した偽装的な無という疑念はあてはまらない。2 節で確認したように、偽装的な無は、対象が存在し、かつ、存在しないというような矛盾についての疑念であった。世界の非存在の場合、どの事態も不成立であるような場合とは異なり、対象は単に存在しないのであって、矛盾が生じる余地はない。したがって、世界の非存在は偽装的な無ではない。

では、前期ウィトゲンシュタインにおける世界の非存在を、全く何もないということと同じだと考えることができるだろうか。4 節で確認したように『論考』が想定している対象は、われわれの命題の意義が確定していることの根拠となる特定の諸対象である。では、これらの対象以外のものは存在しないのだろうか。

「しかし命題によって表現不可能なもの（そして対象でもないもの）は存在不可能だ、というのか」仮にこのようなものが存在するとしても、これはまさしく言語によって表現不可能であろうし、これについて問うこともできない。⁽¹⁶⁾

ウィトゲンシュタインによれば、私にとって表現可能なものは最終的には私の命題の意義の構成要素である対象に限られている。そのため、それ以外のものについては表現不可能であり、それ以外に何かがあるかどうかを問うことはできない。

確かに、少なくとも『論考』の枠組みにおいては、表現可能なものの以外のものであるかどうかを有意義に語ることはできないかもしれない。しかし、そのことから、表現可能な対象だけが存在する、すなわち、世界が存在しなければ全く何もないのだとはいえない。したがって、ウィトゲンシュタインが神秘ということで問題にしたのは、現実には全く何もないのではないのはなぜかということではなく、我々が世界をある決まった仕方でも描写することができる、その根拠としての特定の諸対象が

なぜ存在するのかということである。世界の存在に驚く場合は、私が用いる命題の意義が定まっており、その根拠の存在を認めていなければならない。しかし、全くなにもないのではないということに驚く場合があるとすれば、それらを認める必要はない。このように、前期ウィトゲンシュタインの世界の非存在、ヴァン・インワーゲンの偽装的な無、そして、全く何もないということは、それぞれ別の事柄なのである。

最後に、以上で、対比として用いてきた全く何もないということについて述べたい。私は、もしこの「全く何もない」が有意味な文であるとすれば、この文は何らかのものの非存在を表す否定文ではなく、それ以上分析できない、固有の形式をもったものとして検討する必要があると考えている⁽¹⁷⁾。その際、次の2点の理由から、(本稿で示したように、ウィトゲンシュタイン自身はこのような無を問題にしなかったにもかかわらず、)後期ウィトゲンシュタインの哲学が手がかりとなると思われる。

まず、後期のウィトゲンシュタインは、『論考』の命題の一般形式のように、ある形式をすべての命題の本質とするような過度な一般化を批判している。このような後期の立場からすれば、従来「無」について提案されてきた形式から区別される「全く何もない」という文に特有の形式を検討する余地がうまれるのではないか。また、もうひとつの点として、ウィトゲンシュタインは構文法によって定められる可能性の根拠を世界の事実(現実がどのようなものであるか)に求めることはできないと考えている。「全く何もない」は経験的に偽であることは明らかである一方で、それを文字通りにとるならば何らかの事実を描写している文であるとは考えられない。そのため、そのような可能性をなぜ認めてよいのかを何らかの事実でもって検討することは不可能であると思われる。ウィトゲンシュタインの可能性の根拠に関する洞察は、全く何もないというような特殊な可能性を考える際にも手がかりとなるのではないだろうか。

註

- (1) 近年では『存在の謎—なぜあるものがあって何もないのではないのか—
(The Puzzle of Existence: Why Is There Something Rather than Nothing?)』というタイトルの論文集が 2013 年に発刊されている。
- (2) Brenner(2016)は、この文には唯一の解釈は存在せず、各々の発話者が明示的にあるいは暗黙に認めている存在論によって変わると主張する。各々の解釈がどのような存在論を前提にしているかは重要であるが、唯一の解釈が存在しないかどうかは検討が必要である。
- (3) Wittgenstein (1965), p.8 (邦訳、p.388) . また、Wittgenstein(1922(1918))
『論考』については、所見の番号を付す。
- (4) Baldwin(1996)が提起した、具体的対象が存在しない可能世界の存在を擁護する形而上学的ニヒリズムの議論について、Coggins (2010) や Heil
(2013) は、こうした「それはほんとうに無といえるのか」という点から考察をしている。コギンズとハイルの主張、そして、彼らの違いについては丸山 (2014) で述べた。
- (5) Wittgenstein (1965) , p.9 (邦訳、p.389)
- (6) van Inwagen(1996), p.109 (邦訳 p.78)
- (7) Ibid., p.110 (邦訳 p.79)
- (8) 以下、奥、野矢訳に従い、‘Satz’を「命題」と訳すが、『論考』においてそれは（偶然的側面として）文としての性格ももつ（3.34 を参照）。また、命題が表現する ‘Sinn’ は「意義」、単純記号である名が表現する ‘Bedeutung’ は「意味」と訳す。
- (9) 野矢 (2006) では、どの事態も不成立である場合といかなる対象も存在しない場合に違いはないものとみなしている（野矢 (2006)、p.186-188）。しかし、本稿では、ウィトゲンシュタインが、事態の不成立によって対応する要素命題が偽であるのに対し、世界の非存在を表す命題をナンセンスとしている点から、これらを区別する。
- (10) 鬼界 (2003)、pp.109-114。また、以下で述べる「対象の単純さ」と「対象を名指す私」との関係については、荒畑 (2009)、pp.181-183 も参照。
- (11) Wittgenstein (1979) , p.64-65 (邦訳、p.239)。

- (12) Wittgenstein (1967) , p.77 (邦訳 p.109)
- (13) 命題と現実との比較の問題については、入江 (2015) を参照。
- (14) ウィトゲンシュタイン (2003)、p.205、野矢による注 (77) を参照。
- (15) ウィトゲンシュタインのこうした見解は、ショーペンハウアーの影響があるかもしれない。ショーペンハウアーは、カントのそれ自身に矛盾する概念の対象としての無、すなわち、否定的無 (nihil negativum) について、「考えることすらできない」としている。(ショーペンハウアー (2004)、pp.236-238)
- (16) Wittgenstein (1979) , pp.51-52 (邦訳、p.216)。また、Ibid., p.31 (邦訳、p.178) も参照。
- (17) 全く何もないということを何らかの存在の否定とは捉えないとする理解は、松井 (2008) (2009) による。

参考文献

(欧文)

- Baldwin, T. (1996). “There Might Be Nothing”, *Analysis* 56 (4): 231-238
- Brenner, A. (2016). “What do we mean when we ask “why is there something rather nothing?””, *Erkenntnis* 81 (6): 1305-1322
- Coggins, G. (2010). *Could There Have Been Nothing? Against Metaphysical Nihilism*, Palgrave Macmillan.
- Heil, J. (2013). “Contingency.” *The Puzzle of Existence: Why Is There Something Rather Than Nothing?*, ed.Tyron Goldschmidt. Routledge. 2013: 167-181
- Kuusela, O. (2008) *The Struggle against Dogmatism: Wittgenstein and the Concept of Philosophy*. Harvard University Press.
- van Inwagen, P. (1996). “Why is There Anything at All?”, *Proceedings of the Aristotelian Society. Vol. 70*, 95-110
(邦訳：「そもそもなぜ何かがあるのか」(青山拓央、柏端達也、谷川

卓訳)『現代形而上学論文集』、勁草書房、2006年)

Wittgenstein, L. (1922(1918)) *Tractatus Logico-Philosophicus*.
Routledge & Kegan Paul (『論理哲学論考』奥雅博訳、『ウィトゲン
シュタイン全集1』、大修館書店、1975年;『論理哲学論考』野矢茂樹
訳、岩波文庫、2003年)

———— (1965) A Lecture on Ethics in the Philosophical
Review, Vol. 74, No.1 (Jan., 1965), pp. 3-12, (「倫理学講話」『ウィト
ゲンシュタインとウィーン学団』黒崎宏訳、全集5、1976年)

———— (1967) *Friedrich Waismann: Wittgenstein und der
Wiener Kreis* Aus dem Nachlaß herausgegeben von B.F.
McGuinness, Basil Blackwell, Oxford (『ウィトゲンシュタインとウ
ィーン学団』黒崎宏訳、全集5、1976年)

———— (1979) Notebooks, 1914-1916 Second edition, edited
by G. H. von Wright and G. E. M. Anscombe with an English
translation by G. E. M. Anscombe, Index prepared by E. D. Klemke,
The University of Chicago Press. (『草稿一九一四—一九一六』奥雅
博訳、『ウィトゲンシュタイン全集1』、大修館書店)

———— (2009) P. M. S. Hacker, Joachim Schulte (ed.)
Philosophical Investigations (4thed), Wiley-Blackwell. (『哲学探究』
藤本隆志訳、全集8、1976年)

(和文)

荒畑靖宏 (2009)「ウィトゲンシュタインとガダマー—有限な理性の不
遜な夢」『ヨーロッパ現代哲学への招待』、梓出版社、pp.176-202

———— (2016)「カルナップ、ウィトゲンシュタイン：形而上学的な
ものをめぐる誤解と理解」『続・ハイデガー読本』(秋富克哉・安部浩・
古荘真敬・森一郎編)、法政大学出版局、pp.287-295

伊佐敷隆弘 (2015)「なぜ無ではなく何かが存在するのか：分析哲学に
おける形而上学の盛衰」『研究紀要』(77)、pp.181-200、日本大学経済
学部

- 入江俊夫 (2014) 「ウィトゲンシュタインの転回に関する一考察—数学の哲学の視点から—」『千葉大学人文社会科学研究(29)』、千葉大学大学院人文社会科学研究科、pp.57-70
- (2015) 「ウィトゲンシュタインの操作概念のある重要な側面について：『論考』6.1261「論理学において過程と結果は同等である」」『千葉大学人文社会科学研究(31)』、千葉大学大学院人文社会科学研究科、pp.79-93
- 鬼界彰夫 (2003) 『ウィトゲンシュタインはこう考えた—哲学的思考の全軌跡 1912-1951』、講談社
- ショーペンハウアー (2004) 『意志と表象としての世界 III』(西尾幹二訳)、中央公論新社
- 野矢茂樹 (2006) 『ウィトゲンシュタイン『論理哲学論考』を読む』、筑摩書房
- 松井吉康 (2008) 「無と存在」『文明と哲学』(1)、日独文化研究所、pp.153-163
- (2009) 「存在の呪縛」『思想』(1025)、pp.141-157、岩波書店 (Matsui, Y. (2007) “Der Bann des Seins” Philosophisches Jahrbuch 114. Jahrgang / 2)
- 丸山栄治 (2014) 「「根本の問い」と形而上学的ニヒリズム—無は可能世界のひとつか?」『愛知』(26)、pp.112-126、神戸大学哲学懇話会

所属 (神戸大学人文学研究科博士後期課程)